

# 子どもが主体的に学びを進める学習とは

～PBL を取り入れた実践を通して～

熊本市立中島小学校 教諭 山崎大地

## 要 約

子どもが強みをいかし、主体的に学ぶにはどうすべきかを考えたときに、子どもに学習の主導権を委ねる機会を増やし、他者との関わりの場を必要に応じて設定することが重要と考えた。そして小学3年国語の「レポートを書こう」を簡易的な問題解決型学習（以下PBL）の形式にして進めた。子どもは興味や関心があることを調査し、読み手の建設的な批判を受け入れたり、教科横断的な学びをアウトプットしたりすることで、レポートが改善され、成長した喜びや達成感を感じていた。本実践を通して、子どもに学習の舵取りを任せて、意見交流する機会を設けることで、子どもが主体的に学びを進められることが明らかになった。

〈キーワード〉 主体的な学び，問題解決型学習，教科横断学習，建設的な批判，自己決定

## 1 授業の概要

一斉授業では理解できず、集中を持続することが難しい本児に対して、本単元は、PBL形式で進めた。そのためミッション、成果物、探究のサイクルの3つを本児と共に設定した。本児は書くことが苦手であったため、成果物の形式は本人が決めるようにした。そしてミッション達成に向け、無理なく取り組める計画を立てる等、自己決定の場を設けた。また、成果物は廊下に掲示することをあらかじめ伝えておくことで意欲を持続させて取り組むことができると考えた。

## 2 授業での取り組み

子どもが見通しをもってミッションをクリアできるようにするために、単元の目的理解と振り返り以外は本児が立てた計画通りに進めた。なお、1時間の構成を（図1）の流れにし、アウトプットや試行錯誤する時間の確保を重視して繰り返し取り組んだ。

上学年の児童にも、自立活動（コミュニケーション能力の向上）の一環として参加してもらった。建設的な批判をする場を設けて、アドバイスをもらい、教科横断的な学びに繋がった。

## 3 主張点

教師主体で授業を計画するのではなく、子どもと対話しながら、ミッションを設定したり計画を立てたりすることで、子どもは緊張感をもって学習に取り組めるようになった。また、他者との関わりを増やすことで、自分では気づけなかった新たな課題が見つかったり、他者意識が芽生えたり、解決していくことでより良くなっていくことを実感できたりした。また、向上心が生まれ、授業で止まっていた学びの機会は、自主学習や宿題にも広がっていった。

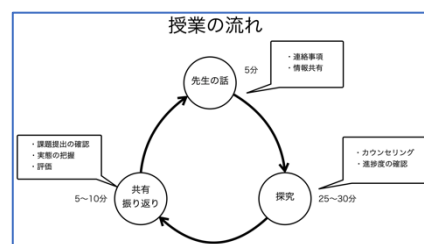


図 1 授業の流れ



図 2 建設的な批判